



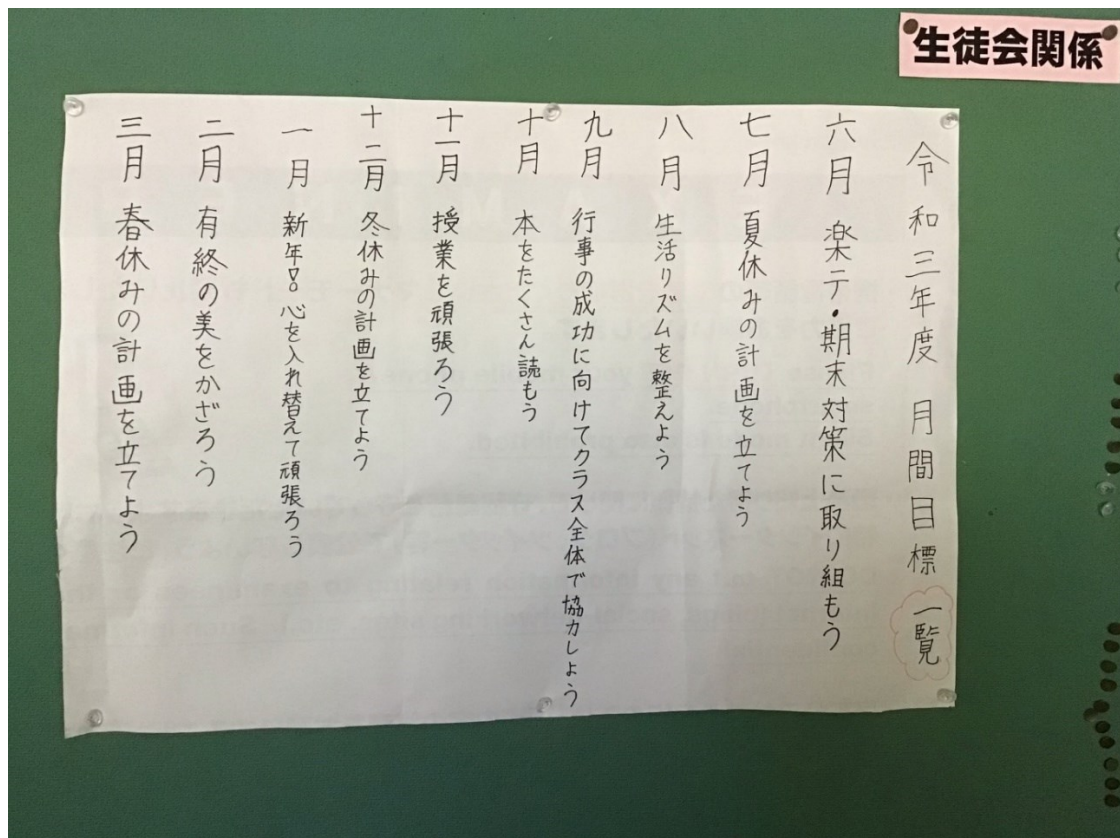
山登如

2021年度 付中通信第6号

発表文化

2021.7.27 (金) 高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

生徒会活動が活発だ。小規模校というサイズ感が与えてくれるものは結構大きいと思う。マンモス校だと、生徒会の活動はなかなか浸透していかない。生徒会役員の人数は大きな学校だろうが小さな学校だろうが、そんなに違いはないのだから、役員諸君が張り切って実践してくれるだけでもかなりの手ごたえとなって、その活動は人目にもつきやすくなる。ましてや本校はここ数年、生徒会人気とあって、役員及び生徒会メンバーと称する生徒らを合わせると、相当な人数となり、全校生徒のかなりの割合を占めたりするものだから、活動の成果たるやすさまじい。



生徒会諸君に「たかちゅうのレジェンドになれ」と檄を飛ばしてからもう6年くらいが経過した。その間、いつも相当の働きをしてくれたと思うが、今年の生徒会は一つ少し高いハードルを乗り越え、次のフェーズに進んだかに見える。この見え方は、私の勝手な独断に過ぎないが、それでもいい。

独断なので、もう一言付け加えておく。

かれらが取り組んでいること、ではなくてその方法を私は回りくどく評価しているのかもしれない。それはまっすぐな評価というものがあるとしたらという、いささか懐古的な評価でもある。どこが懐古的かという、私自身今はPCのアプリを駆使したプレゼンにこだわり、むしろその方法から抜け出せなくなっているが、元々そんな発想ではなかった。

学校には昔発表文化というものが厳然としてあった。少し前の（ちょっと昔になったかも）小学生の自由研究発表を思い出してほしい。彼は、太洋紙（模造紙）に大きく図示したり、写真や絵を貼ったり、グラフを書いたりして、原稿はすべて暗唱した上、大きな声で言えるように練習に練習を重ねてステージに立ったものだ。発表の時は差し棒でその部位を皆に示しながら、緊張の時を過ごしたものだ。

こんなふうにして育まれていたものを、私は勝手に発表文化と呼び習わしてきた。誰も知らない。認知されてもいない言葉だけど、いまだにその文化にこだわっている懐かしい自分がいる。

たかちゅうの生徒会活動は、そういう懐かしさの尺度で捉えがちな私にとって、実に誇らしい類いのものなのである。

